

## なぜ高橋論壇時評は朝日に検証不十分と謝罪を主張しなかったのか

前号で取り上げたネット界の「直接民主主義」がもたらす「集合愚」をじかに味わった小田嶋隆のコラムの最後の結びは、本当は匿名のクレーマーたちによる行進が崖から落下する前に、《彼らには、オーバーヒートして死んでほしい。ぜひ。》というものであった。彼が望むようになるとは思わないが、たとえ彼の望みどおりになったとしても、新たなクレーマーたちが新手法で続々と湧き上がってくるような気がするし、中国のような監視社会ではない日本のようなネット垂れ流し社会では、彼ら愉快犯の勝ちどき声が絶えることはないであろう。

この小田嶋コラムを読みながら併行して考えていたことは、朝日の市川速水東京本社報道局長によるおわびと説明の中での、《8月5、6日付朝刊で慰安婦問題特集を掲載して以来、本社には言論による批判や評価が寄せられる一方で、関係者への人権侵害や脅迫的な行為、営業妨害的な行為などが続》き、《こうした動きの激化を懸念するあまり、池上さんの原稿にも過剰に反応してしまいました。》という文章であった。彼個人のたわいないツイートに対してですら、猛烈な反発の凄まじさと執拗さであったことを小田嶋コラムによって具体的に詳しく説明されると、朝日の《関係者への人権侵害や脅迫的な行為》は想像を絶する大規模なものであったのだろう。

小田嶋コラムの冒頭に出てくる朝日新聞社会部の取るに足らないツイッターに対する反応について、《きょうび朝日の看板を掲げた発言者は、何を言っても揚げ足を取られることになっている。少なくともインターネットの中では、これは、宿命みたいなもの》であるなら、そのツイッターが8月5、6日付朝刊での慰安婦問題特集の掲載以前であったので、その程度の反応で済んだのであろう。小田嶋コラムがいうように、《きょうび朝日の看板を掲げた発言者は、何を言っても揚げ足を取られることになっている》ということは、同じ内容のツイートであっても、朝日以外の看板であれば、《揚げ足を取られること》もなかったということである。

暗澹たる思いにとらわれるが、小田嶋コラムでさらに気づかされたのは、番組での発言に対するクレームは番組あてではなく、慇懃な態度を装った「問い合わせ」のかたちをとってスポンサー企業あてになされるという陰湿な手口である。番組にとっての急所はスポンサー企業にあるから、そこを狙い打ちにせよ、ということなのだ。スポンサー企業が急所であるのは放送業界ばかりではない。新聞業界にとってもまた購読者と共にスポンサー企業は急所であろう。市川局長のいう《営業妨害的な行為》には、購読者に対してばかりでなく、スポンサー企業に対するものも含まれているのかもしれない。購読者については読者の「声」欄への投稿というかたちで注視していたし、執筆者についても池上コラムを通して視野に入れようとしてきたが、スポンサー企業についてはスッポリ抜けたまま、小田嶋コラムで教えられることになった。

さて、池上コラム以外に朝日の紙面を支えている他の執筆者についても見てみよう。たとえば、池上コラムが掲載予定されるはずであった8月29日の前日に、月末頃の池上コラムと同様に月最後の木曜日一回連載で、作家である高橋源一郎の論壇時評が掲載されている。池上コラムの前に高橋論壇時評において、「検証の不十分さ」と「謝罪」が朝日に対して真正面から突きつけられてもよかったのではないかと、という気がふと湧き起こってくる。なぜ、高橋論壇時評はそうしなかったのであろうか。もちろん、そうすべきであったということではない。高橋論壇時評はそうしなかったが、池上コラムはそうしたというその、決定的にも見える違いについて考えてみたいのである。

「戦争と慰安婦 想像する 遠く及ばなくとも」と題された8.28朝日の高橋論壇時評でも、8月5、6日付朝日朝刊で慰安婦問題特集を掲載した問題については言及されている。しかし、池上コラムが提出した「検証の不十分さ」と「謝罪」という視点はそこにはない。だから、池上コラムのような掲載拒否問題が発生することはなかったのであるが、高橋論壇時評はでは、どのように取り上げているのだろうか。

《朝日新聞》が、「慰安婦強制連行」の証拠としてきた「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消す」と発表したのだ(③)。「強制連行」があったかどうかは、もともと本質的な問題ではなかったはずだ。なのに、この一連の記事によって、いつしかそれは「慰安婦問題」の中心的論点になってしまった。そのことの責を新聞は負わなければならないだろう。だが、わたしが取り上げたいのは、そのことではない。

たとえば、**秦郁彦**の『慰安婦と戦場の性』は、この問題について、広範で精密な資料を提示する「代表的」な文献とされる(④)。けれど、わたしは、この、「正確な事実」に基づいているとする本を読む度に、深い徒労感にとらわれる。秦は、慰安婦たちの「身の上話」を「雲をつかむようなものばかり」で、「親族、友人、近所の人など目撃者や関係者の裏付け証言がまったく取れていない」と書いた。慰安婦たちのことばを裏付ける証言をするものなどおらず、彼女たちのことばは信ずるに足りない、と。ほんとうに、そうなのだろうか。》

以上の箇所、問題とされる部分に傍線を引いたが、「吉田調書」問題については一切取り上げようとはしない高橋の文章にみられる曖昧さと問題の回避の特性がここにも見出される。高橋によれば、「慰安婦問題」にとって「強制連行」云々は《もともと本質的な問題ではなかった》のに、いつしか《中心的論点になって》おり、《そのことの責を新聞は負わなければならない》ということであるが、そうすると、「慰安婦問題」にとっての本質的な問題とはなにか、が提出されなければならないのに、この箇所にはそれはない。そして本質的ではない問題を中心的論点にした《責を新聞は負わなければならない》と主張される。

注意して読むと、朝日は負わなければならないではなく、(すべての)《新聞は負わなければならない》ということなのである。朝日は《「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消」すと発表した》ことにおいて、そのことの責を朝日は負わなければならないと読者はうっかり読んでしまいそうになるが、文脈はそうではなく、本質的ではない問題を中心的論点にした《責を新聞は負わなければならない》、その中に朝日も含まれるというようになっているのである。朝日が《「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消」すと発表した》ということは、本質的ではない問題として曖昧にされ、責はすべての新聞にあるというように、朝日にとっての問題が巧妙に回避されているのだ。この高橋論壇時評が池上コラムの対極で、読者にではなく、朝日により多く顔を向けているのが、そこに露骨にみられる。

秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』に対する評価についても、その露骨さは貫かれている。《朝日新聞が、「慰安婦強制連行」の証拠としてきた「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消」すと発表した》ことは、秦郁彦が15年前の1999年に刊行した『慰安婦と戦場の性』が正しかったということ、朝日が遅ればせながら、認めたということにほかならない。もちろん、それは朝日からすれば、『慰安婦と戦場の性』に書かれていることすべてが正しいということではなく、「吉田清治発言」が虚偽である点についてそうである、という限定が設けられているにちがいない。それはその通りであろう。

だが、《しかし、今頃やっと、という思いが拭い切れません。今回の検証で「虚偽」と判断した人物の証言を掲載してから32年も経つからです。》と池上コラムが呆れていたように、《今頃やっと》なのである。「吉田清治発言」についてだけであろうとも、朝日は秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』を認めざるをえなくなったのであり、高橋論壇時評はその点の直視を避けたところで、《ほんとうに、そうなのだろうか。》と、小首を傾げているのだ。朝日も遂に認めざるをえなくなったということの前にまず立った上で、それから小首を傾げるのが筋道であるのに、小首を先に傾げようとすることは、やはり高橋論壇時評は朝日にとっての不都合な問題を削除したまま、問題を別の方向にずらそうとしているとしか思われない。

学者として秦が、《慰安婦たちの「身の上話」を「雲をつかむようなものばかり」で、「親族、友人、近所の人など目撃者や関係者の裏付け証言がまったく取れていない」と書》き、したがって、《慰安婦たちのことばを裏付ける証言をするものなど》いないことを表明したのであれば、新聞は虚偽の「吉田清治発言」を鵜呑みにしてはならなかったように、秦のその結論に対しても鵜呑みにしてはならないだろう。しかし、秦が提示している資料については確認できるし、《慰安婦たちの「身の上話」》についても、《慰安婦たちのことばを裏付ける証言》があるのかどうか、取材も可能であろう。朝日は汚名挽回のために率先する義務と責任を、今回負うことになったといえる。

高橋論壇時評の《ほんとうに、そうなのだろうか。》は、秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』に対してだけでなく、「吉田清治発言」に対しても向けられていれば、今回の朝日問題は起こらなかったのである。高橋論壇時評は秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』に対して《ほんとうに、そうなのだろうか。》と思うのであれば、朝日が32年間も「吉田清治発言」に対して同じことを思ってこなかったということについて、どうして一言も触れないのであろう。そのような高橋論壇時評であるなら、読者もその時評に対して《ほんとうに、そうなのだろうか。》と思わざるをえなくなるのではないだろうか。